

シンポジウム 「台湾の多元文化と教育——原住民族の取り組みから」

部落大学カリキュラムから烏来女性のエンパワーメント、 工芸復興への展開

王 雅萍

(石村 明子 訳)

はじめに

第1節 台湾の原住民族部落大学と社区大学運動の共振

第2節 烏来区の新北市部落大学カリキュラムの展開と工芸復興

第3節 女性のライフヒストリー「イナの花嫁衣裳」から始まった女性のエンパワーメント

第4節 国立政治大学と烏来の教育科目エンパワーメントの協力

——政治大のミニ烏来と烏来のミニ政治大

第5節 烏来編織協会の展示企画と工芸復興の補佐

おわりに

(要約)

筆者はかつて台湾の社区大学運動と原住民族部落大学の発展過程に関与した経験をもつ。国立政治大学のロカ・プロジェクトは、2013年より原住民族部落大学のカリキュラムとして烏来女性のライフヒストリーを記録する科目を通じた女性のエンパワーメントから開始し、多様な学部の教員13名が14の実践案を企画・実行し、コミュニティ経済の永続的発展を目指してきた。それには政治大学の多くの学生が参画し、政治大学の教養科目には「タイヤル学」が開設されて烏来の人が講師を務めるなど互恵の関係も結ばれた。ロカ・プロジェクトは長期にわたり烏来編織協会の随伴者として織物の展示企画や工芸復興を補佐し、部落の国際化を進めてきた。台湾では現在、大学が教育研究のみならず、都市と農村の発展、地域文化の振興、コミュニティ再生、地域の価値創造に貢献することが「社会的責任」として求められるが、ロカ・プロジェクトはこの実践に他ならない。

はじめに

烏来 (Ulay、タイヤル語で「温泉」の意) は、国立政治大学から最も近い原住民居住地であり、その距離は40キロメートルほどである^(訳注 i)。また、新店溪流域の上流は台北市・新北市にとって重要な水源保護区である。国家科学委員会 (現在は科技部に改称) による文化創造・社会実践プロジェクトのもと、2013年から政治大学のロカ・プロジェクト^(訳注 ii) チームは審査を経て、女性主体の「烏来編織協会」(編織は機織の意) と男性主体の「烏来タクシー観光協会」という2つの地域コミュニティ^(訳注 iii) 組織の随伴者となった。この2つの協会はその後、烏来女性が組織する編織協会により良好な活動を展開した。

本論文では女性組織のエンパワーメントという角度から、部落大学^(訳注 iv) における烏来女性のライフヒストリーのカリキュラムでの随伴に始まり、政治大学と烏来が協同で「タイヤル学」を推進し、烏来編織協会の作品展示や国際交流など工芸におけるエンパワーメントに協力してきた経緯について述べたい。

第1節 台湾の原住民族部落大学と社区大学運動の共振

台湾の社区大学運動は1990年代に黄武雄らが推進した社会教育運動である。この全国的な教育の風潮は、台湾の社会でそれまで重視されてきた補習教育や技能・芸術・余暇教育などの社会教育とは異なっていた。社区大学運動は公共性、教養性、根本性を重視し、経験的知識から公共領域を開拓し、問題分析や批判的思考の能力を養えるよう学習者を啓発するものであった。台湾では戒厳令解除後の社会再建が喫緊の課題であり、1997年の年末に黄武雄が「深化民主与發展新文化（民主の深化と新文化の發展）」という文章を発表し、社区大学の全面的設立による民主的素養の向上を提唱した。そして、1998年5月4日に「人本教育基金会」（人本は人道的の意）により社区大学準備委員会が、1998年9月に台北市文山区において初の社区大学となる「文山社区大学」が、1998年11月には台北県社区大学五校連合準備室がそれぞれ創設された。現在は台湾全土に100近くの社区大学があり¹、県、市、郷、鎮などの地方行政がその推進の担い手となっている。そのうち台東市南島社区大学はオーストロネシア文化の推進を主な目標として掲げているが、自主経費による運営のため、その推進は難しかった。

筆者は国立政治大学の専任講師として初めて教職に就いた際、就業時間外に「410民間教育改革団体」^{〔訳注 v〕}が主催する日本語の勉強会に参加していた。そして民族学の多文化理念を推進するべく、1998年に台北県社区大学5校の社区大学促進を担う講師の選抜で非常勤講師に選ばれ²、汐止社区大学、文山社区大学、永和社区大学、蘆荻社区大学、台北市部落大学、新北市部落社区大学^{〔訳注 vi〕}で授業を行った。授業内容は主に映画から民族を知り、民族学の知識と原住民族^{〔訳注 vii〕}に対する理解を促すというものであった³。なかでも文山社区大学では、当時大学院に在籍中の原住民青年に自民族の視点による原住民族文化の談話を依頼し、原住民族文化に対する一般社会の人々の理解と認識の促進に努めた。

台湾の原住民族部落大学の推進は、台湾全土で盛んに発展する社区大学に倣い、2001年に浦忠成、楊志偉、孫大川らが原住民族部落大学をその年の公的議題にするべきだと提言した。中華民国教育部はこれを2001年の政策議題に挙げ、推進計画を策定し、2002年に原住民族委員会と連携して原住民族部落大学に関する指導施策を推進し、同年9月には台湾初の原住民族部落大学が宜蘭に創設された⁴。目下、台湾の原住民族部落大学は15か所に上り、「部大」「原住民部落大学」とも称される（王雅萍2006）。近年、台湾では原住民族大学の設立についての議論がなされており⁵、2017年12月29日には実験教育3法の修正案が採決され、小中学校で実施されている実験教育が初めて高等教育まで拡張された。台湾では将来的に実験小学校、実験中学校、実験高校のみならず、「実験大学」が登場するかもしれない⁶。台湾初の実験大学は、原住民を主な募集対象とする原住民族大学である可能性がある。実のところ、2001年前後の原住民族部落大学創設時には、すでに議論が巻き起こっていた。2006年当時の原住民族委員会教育文化処の専門委員だったクツン・カラヴァガン（谷縦・喀勒芳安、Qucung Qalavangan）は、原住民族部落大学の政策理念を（一）原住民部落の伝統的な生活規範の再建、および民族エスニックグループ^{〔訳注 viii〕}の自信と尊厳の確立、（二）原住民族教育改革運動の推進、（三）原住民部落での教育における主体性

の明確化、(四) 原住民部落の活力創生、(五) 社会的風潮に応える、(六) 原住民族自治を目指す、としている。また、原住民族部落大学の運営における政策目標を（一）コミュニティ発展のための人材育成、（二）現代化した市民の育成、（三）原住民族文化の創造性の促進、（四）原住民族への生涯学習の場の提供、としている（谷縦・喀勒芳安 2006、21 頁）。

原住民族部落大学は設立後、原住民族委員会と教育部の社会教育関連の経費分配の影響を受けた。社区大学は地域機関が主な運営機関となり、設立時は県あるいは市政府の所管になるため、原住民族の主体性や公共参加に対する取り組みが比較的難しい。設立後も長い間、カリキュラムは結局社会の主流派の意識のコピーに過ぎないのではないかと、やはり伝統文化の伝承と再現を目指すべきではないか、という議論が続いた。台北市原住民族部落大学のウェブサイトによれば、その運営目標は「生涯学習の環境を原住民に提供し、原住民族文化の伝承と創生を促進し、原住民族の人材と現代的な市民を育成する」とされる。原住民族委員会と教育部はプロジェクトへの補助金提供という形で、2004 年から地方政府が原住民族部落社区大学の設立に積極的に取り組むよう奨励し始めた。台北市政府原住民族事務委員会も 2005 年 5 月に台北市原住民族部落社区大学を設立し、現在まで前述の目標の下で取り組みを行っており、台北市の都市としての特色にも対応し、台北に移住あるいは滞在している原住民族が必要としているものや彼らの特徴を考慮し、都会型のカリキュラムや教育活動の企画推進を行っている。また、かつて花蓮県原住民族部落大学執行長を務めたアミ族の鍾文観は、原住民族部落の人々がより深く学べるよう熱心な取り組みを行い、台湾原住民と国際化を結び付け、視野を広げた。彼は「原住民の一員として、原住民族文化を守るとともに、自分の部落の文化を理解しなければならない。とりわけ母語を重要な一部分と見なして原住民の知識体系と教育の基礎を築き、部落の文化と社会、さらには原住民族文化が持つ独特な世界の伝承を試みたい」⁷と考えていた。原住民族委員会から経費が下り、各県各市の原住民族部落大学は 10 年余りの運営努力を経て、カリキュラムや受講生募集、開講などの様式を定着させてきた。

筆者が関わった社区大学の教育現場の経験、および部落大学のカリキュラム視察とアセスメントを振り返ってみると、社区大学には全国促進会があり、社区大学の運営に携わっている人も社会参加や公共参加への意識が強い。例えば、永和社区大学の去年の募集広告の文言は「開校 19 年目を迎える永和社区大学は、2018 年に組織拡大を行うにあたり、コミュニティづくり推進やコミュニティの教育事業に関心があり、永和社区大学で長期間熱心に取り組むことが可能で、地元で理想の実践と自己実現を目指す熱血青年を求む」であった。さらに応募者は履歴書の提出前に、永和社区大学の創始者である黄武雄の『学校在窓外（学校は窓の外に）』（左岸文化、2013）を読んで社区大学の創立趣旨と目標を理解することが求められた。その一方で、各県および各市政府の部落大学の担当者は業績を重視し、原住民族部落大学の教育理念や、「原住民族自治を行う人材」や「部落による参与」という目標の達成などの政策目標について考えることはあまりない。また、部落大学の担当部署は原住民局や原住民処の教育文化科であり、「原住民族部落の活力創生」や「コミュニティ発展のための人材育成」のような産業関連の政策的思考と部落大学のカリキュラムを融合させることは難しく、それは経済建設科が職業訓練や創業指導という形で直接

行っているようである。そのほか、全体的に見てみると、社区大学と部落大学の運営部署間の交流や対話は実際のところ少ないが、例えば、永和社区大学は官大偉、voyu、陳誼誠など原住民青年の研究者にカリキュラム開設や原住民文化サークルの運営を依頼し、社会の人々に原住民族を紹介している。また、台北市原住民族部落大学は、非原住民学習者に対しても有料で北原会館^[訳注ix]において原住民族の言語や各民族の工芸の授業を受けられるようにしている。これは、都会型の部落大学が原住民族文化の交流の場を推進する役割を担うようになったものといえる。

第2節 烏来区の新北市部落大学カリキュラムの展開と工芸復興

新北市原住民族部落大学の近年の運営政策の目標は、「文化工芸、ジェンダー教育、踊りと芸術、民族語伝承、高齢者向け講座」などである。烏来区は新北市唯一の山地原住民族行政区であり、新北市原住民族部落大学では原住民地域成人教育政策のサポートを受け、烏来と関係のあるカリキュラムを学期ごとに組んでいる。近年のカリキュラムは表1の通りである。国立政治大学社会実践オフィスによる烏来ロカ・プロジェクト⁸では、プロジェクトアシスタントの范月華が、汪秀琴の「イナの花嫁衣裳」(2013)、林慧貞の「皮革と布のつながり」(2014-2018)、烏来編織協会の「原住民伝統の織物の利用」(2016-2018)、周小雲(Yokay・Bayas)の「原住民の植物染めの利用」(2018-2019)を補佐した。また、周瑞祥の弓矢のカリキュラムを原住民局に推薦して開講に漕ぎつけた(2017-2019)⁹。専任アシスタントのアピャン(Apyang)と陳雯琳も「しみのある家・古い家屋についての情報共有」(2015)と「タイヤル色彩画クラス」(2015)の2科目に参加し、補佐役を務めた。

烏来は原住民居住地で部落間の距離が離れているため、部落大学の開設が難しく、部落の青壮年層も就業や経済のプレッシャーを抱えている。そのため近年、烏来で行われる部落大学の主なカリキュラムは、タイヤルの織物、籐編み、弓を利用した織物、伝統的な弓矢の制作など、主に工芸の復興に関するものとなっている。そのうち、籐編みの科目を担当していた烏来区福山の古老である林福全氏は残念ながら2018年に亡くなった。烏来タイヤル族の林福全古老は、享年82歳で、国宝級の工芸家として、伝統工芸の保存と伝承のために、新北市部落大学講師として籐編みのクラスを数年間担当した。幸い、新北市原住民族部落大学が2016年に開講した映像制作の科目で、林福全古老がどのように籐編みを学び教えるに至ったかの過程や籐編み品の紹介、背負い籠の制作と模範授業の映像が残されていた。40分間のこの映像は、林古老がタイヤル語で説明し、それに中国語字幕を付けたものである。これにより烏来タイヤルの古老による伝統的な籐編み制作の教え方を残すことができた。

近年、伝統的な弓術が原住民族にとって人気のある運動となっており、そのため烏来でも弓矢の制作が流行しつつある。新北市伝統弓箭協会の理事長の周瑞祥による科目も定期的に開講されており、学習者も一定数いる。

新北市原住民族部落大学のカリキュラムのなかの烏来関係の科目を表1にまとめた。

表1 新北市原住民族部落大学の烏来関係の科目

年度	科目名	担当講師	授業時間	開講会場
2019	1. 縫製とタイヤルクラスが出会う時——皮革と布の出会い	嚴欣怡 林慧貞	(土) 08:00-17:00	新北烏来区環山路 (第一市民活動中心)
	2. 原住民手工艺制作	嚴欣怡	(火) 09:00-15:00	金拿善工坊
	3. 原住民植物染めの基礎技術	周小雲	(金) 08:00-17:00	新北烏来区環山路 (第一市民活動中心)
	4. 原住民伝統弓矢文化伝承	周瑞祥	(土) 13:00-17:00	新北市烏来区西羅岸路 (烏来区総合運動場)
	5. 原住民の十大疾患と養生、健康維持——こりのセルフケア	陳彥彰	(木) 19:00-21:00	
2018	1. 烏来タイヤル織物利用の伝承	高秋梅 周林初枝	(土) 08:00-13:00	新北烏来区環山路 (第一市民活動中心)
	2. 縫製とタイヤルの出会い——皮革小物	林慧貞	(土) 08:00-14:00	新北烏来区環山路 (第一市民活動中心)
	3. 原住民伝統弓矢文化伝承	周瑞祥	(土) 13:00-17:00	新北市烏来区西羅岸路 (烏来区総合運動場)
	4. ネットマーケティング・アドバンスコース	林家豪、甘克帆・巴宴爾、吳宗哲	(土) 09:00-17:00	由奈工房 (新北市烏来区烏来来里環山路71号)

出典：新北市原住民族部落大学カリキュラム表から筆者作成

第3節 女性のライフヒストリー「イナの花嫁衣裳」から始まった女性のエンパワーメント

政治大学烏来ロカ・プロジェクト1年目の2014年3月19日、我々は新北市原住民族部落大学にカリキュラム提案をした。まず提案したのは「烏来のイナの花嫁衣裳」と「烏来の黄籐編みクラス」の2つの科目であった。そのうち「烏来のイナの花嫁衣裳」は烏来の女性に対するエンパワーメントの歴史文化に関する科目である。王雅萍、范月華、汪秀琴の3人が協同で科目を提案し、承認を経て開講されることになった。烏来に嫁いできた汪秀琴は小学校教員を退職し、烏来の婦女会で活躍している。科目は、政治大学烏来ロカ・プロジェクトの研究助手が実施を担当し、1年目の授業は筆者自身が議論も含めて主導した。その後、筆者は新北市部落大学のクラス審査評価委員となったため、2期目からは政治大学の部落工作站（以下、村落取組拠点）の担当者である范月華が補佐を担当した。

筆者は原住民族教育カリキュラムの関係で学生を引率し、しばしば烏来を訪れていたが、烏来のこれまでの過度な観光化については思うところがあった。郭孟佳による2004年の論文「公主変女傭：観光発展下の烏来泰雅族女性（邦訳 お姫様が召使に：観光発展下の烏来タイヤル族女性。以下、同様）」は、1950年代以降、烏来のタイヤル族女性が観光産業に加わった後の働き方と観光発展の関係について述べたものである（郭孟佳 2004）。烏来は日本統治時代の歌や踊りの教育、国民党政府期の観光関連政策や施策、その後20年ほどの観光産業の没落、そして2000年から突如起こった温泉観光という状況を経てきたが、当論文は国際的分業という視点からそれに

ついで次のように分析している。烏来観光の第一波である「山胞観光」の発展においては、1950年代後期から烏来は特にアメリカ人や日本人などの台湾を訪れる外国人観光客が必ず行くべき場所となり、タイヤル女性による歌や踊りの上演は「山胞観光」の目玉であった。烏来のタイヤル女性は観光産業によって国際分業体系における「再生産のポジション」に加わったのである。しかし、第二波の「温泉観光」ブームは、タイヤル女性にとって「山胞観光」時代のような就業機会とはならなかった。観光における焦点の移り変わりにより、タイヤル族女性の労働地位も変化した。

筆者はかつて、宜蘭のタイヤル族を描いた『山深情遥—泰雅族女性綱仔絲菜渥的一生（深い山、遙かな心：タイヤル女性チュワス・ラワの一生）』（1997）、阿里山ツォウ族の湯蘭花による『優路那那，加油！—湯蘭花挑戦自我的故事（頑張れユルナナ Yulunana！—湯蘭花チャレンジ物語）』（1999）、宜蘭平埔族の『天送埤之春（天送埤の春）』（1993/2013）など、異なるエスニックグループに属する原住民族女性のライフヒストリー著作を数多く収集したことがある。そして文山社区大学と台北市部落大学では、女性たちの生き生きとした数多くのライフヒストリーに出会った。

台湾社会では2004年の総統選挙後、エスニックグループ間の分裂が加速した。国家アイデンティティに関わるエスニックグループの問題は、議論が難しく緊張を生む話題であり、信頼と意思疎通の架け橋が必要であった。そのような雰囲気の中、「外省台湾人」という身分アイデンティティを持つ人々が「外省台湾人協会」を設立し、文化間の意思疎通と和解を目指す架け橋になろうと努めた。同協会は「私たちは文化的な取り組みを通じて、人間的で普遍的な思いやりと記憶の再構築と反省により、市民政治の亀裂を埋め、エスニックグループ関連の話題において理性と感性のバランスが取れるように努める」¹⁰ という理念を掲げ、『流離記意—無法寄達の家書（流浪の記憶と心—届かない手紙）』、『人生、從那岸到這岸—外省媽媽書写誌（人生、向こう岸からこちらの岸へ—外省人ママの執筆ノート）』、『鄉関処処—外省人返鄉探親照片故事書（故郷はいたるところに—外省人里帰りの写真と物語）』、『遇合—外省／女性書写誌（出会い—外省／女性の執筆ノート）』などの書籍を企画し出版した。これらの書籍は鄭美里先生が永和社区大学で開設した「タンポポ外省人女性・ライフヒストリー執筆ワークショップ」という無料授業が基になっており、外省人エスニックグループの歴史的記憶に興味があって文芸創作をしたいと思う女性の参加を奨励した。その出発点は、主にはエスニックグループ間の関係や歴史に対する思いやりである。プロジェクト計画者である外省台湾人協会によると、その目的は次の通りである。「一個人は歴史の『傍観者』ではなく『解釈者』であり、作者は自らの経験をもとに、ライフヒストリーを執筆することで主観的感情を保持することができる。それは外からの質問に受け身で答えるのではなく、自分から積極的に問いかけるのであり、自分に合った方法で伏線を敷き、それに答えるのである。そのため、一般の学術調査やオーラルヒストリーというアプローチではなく、ワークショップという形式を取った。また、外省人女性がワークショップで文芸創作能力や興味を培い、そこを離れた後も、探索し、記録し、創造し続け、より素晴らしい人生を送れるよう期待する」¹¹。

筆者はここから着想を得て原住民族女性のライフヒストリー執筆という科目を創案し、新北市

社区大学に12週3時間、計36時間のカリキュラムの提案をし、由奈工房^(訳注x)で授業を行うことにした。宋神財（Alow・Hola）先生の推薦により、婦女会の理事を務めていた汪秀琴先生と協同で授業を進めることになった。宋神財先生は、文山社区大学のタイヤル文化関連科目における初の講師であり、新北市文史学会と協同で部落文化の調査研究を行い、現代の烏来の発展ビジョンを形作った。編纂グループはリーダーである宋神財先生の指導のもと、フィールドワークや文献研究によって調査研究と考証に取り組んだ。そして、原住民タイヤル族の歴史と文化を再現し、現代のコミュニティに精神的な意義を与え、文化や芸術の伝統性や現代性についてインタビュー調査を行い、21世紀の烏来タイヤルによる新しいグローバルな視野とビジョンを構築し、書籍『時代と遭遇：南勢溪流域泰雅部落文化記録与研究（時代と遭遇：南勢溪流域のタイヤル部落文化の記録と研究）』を完成させた（宋神財 2013）。

「イナ」というのはタイヤル部落における嫁の呼称である。私たちは授業の方式で烏来タイヤルのイナのライフストーリーを少しずつ形にし、烏来のイナを烏来区の文化伝承の象徴とした。一連の授業を通じて、村おこしの場を今日の文化、全ての人が共有できる芸術の特区とし、住民の人生の記憶と文化的空間の想像とを結び付け、創造力豊かな芸術文化を表現する場としたのである¹²。授業内容は主に人生のそれぞれの段階の古い写真を見て話をするのであった。女性のライフヒストリーを軸にしたため、それらは婚姻や家庭、手工芸などの歴史的な記憶と関係し、その結果、この授業によって多くの女性たちの中には共同体の感情が形成された。汪秀琴先生自身も台中和平区達観部落から烏来に嫁いできたイナであり、父親は阿里山のツォウ族であった。汪先生が学習者への連絡と授業の主導を担当し、筆者も2015年4月から7月の第1段階の女性によるライフヒストリーのクラスに参加した。烏来の女性を主体とした人生経験の口述は、このように順調に開始した。

女性のエンパワーメントに関して、タイヤル文化や社会での分業では、伝統的な機織りは女性の仕事であった。機織りは単に観光産業における記念品というだけでなく、部落の女性の生活と密接な関係にある。そこで政治大学ロカ・プロジェクトチームも、新北市原住民族部落大学の科目と連携するという形で部落の女性たちに協力し、ライフヒストリーの執筆と出版を計画した。そして烏来の地元女性、若者、ロカ・プロジェクトのアシスタントのアピャン、范月華、ならびに政治大学X書院（クリエイティブ・ラボ）の学生たちが共同で『彩虹的嫁衣：烏来 Ina 的生命故事（虹の花嫁衣裳：烏来イナのライフストーリー）』を執筆した。これは2014年末に出版される予定であったが、タイヤル博物館に勤務する高淑華さん、羅蘭工房のラバイ（Labay）先生、由奈工房の汪秀琴先生が、現時点での出来上りに満足せず、子どもたちとも共有できる内容にしたいということでさらなる執筆を望んでいるため、まずは出版を待つことにした（湯京平 2014）。さらなる執筆についてはすでにロカ・プロジェクトチーム専任アシスタントの范月華と部落の女性たちが協力しながら進めており、原住民族部落大学カリキュラムに合わせて成果報告書として初歩的なライフストーリーを作成したが、正式には出版されていない。

第4節 国立政治大学と烏来の教育科目エンパワーメントの協力——政治大のミニ烏来と烏来のミニ政治大

国立政治大学民族学科は、1997年からすでに烏来の福山小学校と民族教育カリキュラムにおける郷土教育の文化教材の共同開発に取り組んでいた。前後して多くの大学院生が烏来のタイヤル族研究を修士論文のテーマにした。筆者は2004年から同大の教育学部教員養成センターの原住民教育カリキュラムに関わっていたことがきっかけで、2012年から教育部の「市民リテラシー形成プロジェクト」でのカリキュラムの補佐を行い、数多くの教員や学生も烏来での学外学習を始めるようになり、烏来との協力関係によって政治大学の学外拠点が形成されてきた。

台湾の大学のほとんどは外界との壁があり、かつては教育においても壁を築いていた。壁の内側の教員や学生は長い間、近隣のコミュニティの発展にそれほど関心を持っていなかった。人文社会で名の知れた政治大学はまだ良い方で、社会的な改善を図る実践的なプロジェクトに取り組む教員や学生が多く、筆者同様に前述の社区大学の教育改革運動に取り組む教員もおり、多くの教員が原住民部落で様々な研究プロジェクトのためのフィールドワークを行っていた。大学側の統合的な体制が一部整っていなかったこともあり、このような取り組みの成果はより一層目立った。2012年の年末に科技部による社会実践と文化創生に関する3年間のプロジェクトの公募があり、政治大学は「政治大学と烏来のロカ発展——大学のパートナーシップとコミュニティの統合型管理実践プロジェクト」という企画案で応募したところ承認されるに至った。このプロジェクトの略称は「政治大烏来ロカ・プロジェクト」¹³であった（王雅萍・湯京平・陳文玲 2014、1頁）。

これにより、政治大学は長期にわたり烏来との協力関係を展開することになった。烏来は台北市と新北市の山裾の部分にあたり、そこに住むタイヤルの人々は早くから都市部との接触があり、ある程度都市化も進んでいる。そのため、特有の環境（とくに温泉、滝、森林などの天然資源）を生かして、主流社会の市場経済へといち早く溶け込み、一時期は台北近郊の観光名所として繁栄した。しかし烏来が長期にわたり主流社会の市場経済と合一であったことで、タイヤル文化が急速に衰退したばかりか、労働力や土地、貨幣の過度な商品化のために景気の周期的悪化に陥りやすく、失業・貧困・酒浸り・住宅不足・医療問題などの社会問題が頻発し、また解決されることがなかった。このような課題を解決するため、政治大学の烏来ロカ・プロジェクトは柱となる次の2つの取り組みを行った。1つ目は、多元的な運営やエンパワーメントを通じて政治大学と烏来のタイヤルコミュニティとの間に「長期パートナーシップ」を築き上げること、2つ目は参加型計画（participatory planning）の視点から、烏来の「地方における経済多様化」の実践案を必要に応じて調整しながら推進することである。

烏来ロカ・プロジェクトには政治大学の様々な学部から、湯京平、江明修、王雅萍、官大偉、蔡炎龍、陳文玲（広告学科）、陳文玲（民族学科）、甯方璽、孫振義、曾正男、王增勇、王信実、楊建民の13名の教員が参加し、政治学科教授の湯京平がプロジェクトリーダーを、民族学科副教授の筆者が実行責任者を務めた。また、科技部のポストドクター研究員の黄約伯、宋峻杰、蔡侑霖、林子新、李律鋒、専任アシスタントの廖修筠、范月華、陳雯琳、朱靜女、程廷、アリーマ

ン、林凱恩、さらに多数の兼任アシスタントが当プロジェクトに取り組んだ。プロジェクトで予定されていた実践案は14あり、それぞれの案にふさわしい研究者が企画、実行を担った。このように多様な実践案は、それぞれ専門分野を持つ学内の研究者がともに思索を重ねた成果であり、「地方における経済多様化」の開発に挑戦するには必要不可欠なものであった。

烏来のコミュニティ自治に対するエンパワーメントについては、政治学科の湯京平の指摘によると、部落会議は烏来の原住民族にとってコミュニティの枠を越えた、最も重要な決定組織である。しかし、資本主義の衝撃や親族の分裂により、元来存在していた組織としての *gaga*^{〔訳注 xi〕} の規範や機能は徐々に失われていった。部落会議を再び烏来原住民の決定の場とするべく、政治大烏来ロカ・プロジェクトと烏来区公所が協同で、まず「タイヤル学」という名称を広め、政治大学内に烏来タイヤル族長老諮問委員会(部落内の諮問委員24名を招聘)を設置し、古老によるオーラルヒストリーなどの文化歴史資料の蒐集を行ったほか、古老に再び部落の発展に関わる公的議題に関心を持ってもらうよう働きかけ、青壮年層に対しても影響を与えようとした。民族学科に所属する筆者は北海道大学のアイヌ文化振興の取り組みに倣い、政治大学で「タイヤル学」を推進し、タイヤルの古老を専任あるいは兼任の科目教員として雇用し、タイヤルの言語や自然環境に関する文化を知るためのカリキュラムを体系的に開設し、学生にはサービス・ラーニングでタイヤルの集落に行くよう勧めた。政治大学の社会福祉系サークル「愛愛会」の担当教員である蔡炎龍は、タイヤル部落でタイヤル文化を学びつつ学習支援を行うべく学生たちを引率し、創造性を発揮してタイヤルの伝統的な要素を生かし、それを主流社会の生活のなかで利用できるようにした。

筆者も烏来で民族語のイマージョン教育の補佐を続けながら、民族教育におけるタイヤル語環境の立て直しや、地元の民族語の先生方のコミュニティによる言語復興の積極的な取り組みへの協力を行った。また、民族学科の官大偉は河川流域におけるタイヤル族の環境や土地の調査を担当し、部落の若者たちが調査能力を身に着けられるよう計画を立てた。そして何度も部落会議を行い、将来の方向性についての調査や記録、解釈などの過程を経ることで、部落の若者たちがあらためて自分を理解し、自分の視点で自分の生活空間を解釈し、時代の意義や永続的發展における資源利用の戦略を考え、外界の政策との対話ができる仕組みを構築し、さらに進んで部落の発展に対する自主性を持てるようにすることを目指した。美しい山林の景色には、温泉水の取り合いでパイプがいたるところに張り巡らされ、観光産業の頼みの綱である共有財産が著しく損ねられ、典型的な「共有資源」の問題を呈しており、現在は地元のNGOと連携して川の流域管理についてあらためて思索しており、関連する事案を紹介し、制度的な解決案を提案してコミュニティ自体がそれを選択できるようになることを目指している。

家系図とオーラルヒストリーについては、タイヤル的な要素の多くが古老の記憶に奥深く隠されているため、民族学科の陳文玲が同学科の学生を引率し、オーラルヒストリーを体系的に掘り起こして整理し、烏来タイヤル族の本来の風貌を残すのに一役買った。文化創生が進む今日、このような文化的要素は重要な資産となるゆえ、意識的に残していかなければならない。そのほか、当プロジェクトでは土地経済学科の甯方璽が烏来に関するアプリを開発した。デジタル融合技術

によってさまざまな形態の資料をデジタル化し、異なる情報プラットフォームに流通させた。さらに空間情報科学技術によって、様々な産業でより役立つ利用が可能になるよう協力した。応用数学科の曾正男は学習問題を提供する「Wiki 教輔平台」（不特定ユーザーの編集による補習用プラットフォーム）を立ち上げ、子どもたちと教員が一緒に問題集を作り上げる形式で、部落内の教員や子どもたちが無料で自分の学習状況をチェックできる環境を提供した。土地経済学科の孫振義は台湾で現在使用されている EEWH-EC（コミュニティのエコ評価システム）やアメリカの LEED（グリーンビルディング認証）を融合させ、現地に適した「原住民居住地型グリーンコミュニティの実践と戦略推進」を提案した。

広告学科の陳文玲は、かつて烏来は本来の原住民らしさを失い安い値段で原住民文化を売っているというマイナスのイメージを持たれており、それを変えるべきであり、烏来の各部落でそれぞれブランドイメージを作り上げる必要があると考えた。そこで「エクスペリエンス・デザイン」「エモーショナル・デザイン」など広告学科ならではのデザイン学の原理を用いる一方で、タイヤルの要素を融合させ、各部落による自身のブランドイメージの確立に協力した。大学院ソーシャルワーク研究科の王増勇は介護に関する聞き取り調査を続け、特定の制度の実験的改革を通じて、財団ではなく部落が介護を行い、被介護者にとって自分の居場所が部落内で見つかるよう、原住民文化の特色を備えた介護制度を発展させるよう提案した。行政学科の江明修と経済学科の王信実は聞き取り調査から、コミュニティの異なる財源の決定要因、およびそれがどのぐらい管理上の要素の影響を受けるかを研究し、タイヤル族の公共財産管理の伝統的観念について十分理解し、コミュニティによる財務管理の仕組み作りと安定した財源額の確保に協力できるよう、NGO と企業が協力し合って、地元によりふさわしいタイヤル的な小規模金融制度を確立することについての可能性を提案した。創新育成センターの楊建民は、部落を永続的発展のための育成拠点とすべく、永続的発展に役立つ各方面の経験について多様な対話が行える学習プラットフォームの設立を提案した。

全体的には、政治大学烏来ロカ・プロジェクトは台湾や海外の地方発展の成功事例を確認し、「オルタナティブな開発」（Alternative Development）という形で、特色のあるコミュニティ経済を形成し、主流経済とは付かず離れずの距離を保ち、完全にそれに溶け込むべきではないと提唱した。言い換えれば、地方格差を緩和するには力づくで格差をなくそうとするのではなく、格差を利用して地方の優越性を確立するということである。

政治大学の社会実践オフィスは2014年4月16日にオープンし、政治大学は烏来との提携で様々な面での提供を行った最初の大学となった。科技部のプロジェクトとしてサポートを受けたのは第1期の3年半の事案であったが、2015年の台風13号による災害復興のため、第2期の文化創造・社会実践プロジェクトは一時的に取りやめた。2017年には申請先を教育部の「高等教育深耕計画」¹⁴に変更し、引き続き経費を確保し、社会実践オフィスと烏来・福山の両部落組織との長期パートナーシップは現在も継続中である。なお、社会実践オフィスで取り組んだプロジェクトで主軸となったものは表2のとおりである。

表2 政治大学烏来ロカ・プロジェクトにおける主軸プロジェクト（2013-2017）

年度	主軸プロジェクト
1年目（2013年学年度） 2013年7月1日-2014年6月30日	1. パートナーシップと信頼関係の確立 2. 部落の自信回復を補佐 3. 部落経済発展の多様な可能性を探る
2年目（2014年学年度） 2014年7月1日-2015年6月30日	1. 烏来部落による伝統的生活空間復活の取り組みを補佐 2. タイヤル伝統の共有に対する心構えを復活させる 3. 烏来の機織りの産業化に対するエンパワーメントの展開
3年目（2015年学年度） 2015年7月1日-2016年6月30日	1. 部落発展に対する自主性を補佐 2. 部落経済の多様な発展 3. 烏来の機織りの産業化を推進
4年目（2016年学年度） 2016年7月1日-2017年6月30日	1. 部落経済の多様な発展 2. 烏来の機織りの産業化を推進

出典：政治大学烏来ロカ・プロジェクト資料に基づき筆者整理・作成。

コミュニティ経済（community economy）発展の成功のためには主流経済から抜け出し、全く新しい文化体制をはめ込まなければならない。共有と贈り物の経済という基礎の上にコミュニティ経済を確立するために、ロカ・プロジェクトチームは「Doing Nothing But Everything」という行動哲学を打ち出した。Doingはアクション・リサーチの過程において、研究者が原住民部落で意思疎通や理性的な思索よりも実際の行動や自らの体験を優先させるが、意思疎通や理性的な思索は欠かせない基礎だということの意味する。Nothingはプロジェクトメンバーが先入観を持つのを防ぐため、成功した事例につられたり引きずられたりなど特定の方法にこだわることを意識的に避けることを意味する。Everythingは全ての議題を選び好みすることなく、コミュニティ経済のカテゴリーに結び付け、部落のあらゆる生活空間に入り込んで努力することを表している。

この行動哲学は次の3つの面で総合的な効果をもたらした。まず、プロジェクトチーム内の議題を整理するにあたり、教員側はそれぞれ研究上の得意分野があるため、意思疎通には相当な労力をかけなければならなかった。しかし、共通認識の会議で教員側がそれぞれ注目している面を共有することで、議題整理がかなり行いやすくなった。例えば「伝統領域」の議題を提案したのは官大偉であったが、王増勇や広告学科の陳文玲、土地経済学科の孫振義や甯方璽もこのテーマに注目し始めた。また、この行動哲学は、部落内部で個人的利益の問題として捉えられていたものが、集団の公的議題として捉えられるようになるのに役立った。例えば第3次都市計画全面的見直しに関心が注がれるなか、個人の土地利益を原住民居住地の自治と資源の共同管理に転化させるという議題が注目されたという具合である。さらに、ロカ・プロジェクトチームと部落との関係において、「Doing Nothing But Everything」の行動哲学はプロジェクトチームに対する部落の人々の信頼を強めた。プロジェクトチームが長い期間にわたり、特に焦点を絞らずに部落の生活のあらゆる面に関わり、議題を選び好みすることなく、争議の場面にも積極的に参加したことで、チームメンバーが烏来に頻繁に出入りし、介入型の研究を行うことが受け入れられるようになったのである。

他方、政治大学が烏来を理解し始めた時期は、烏来の住民が部落の外へと踏みだし外界との関係を持ち始めた時期でもあり、彼らがしだいに自信を持ち始め、エスニシティが生成する好機と

なった。政治大学が開設したタイヤル学講座と、2014年7月3日の「政治大学と烏来との往来・ネットワーク」は、政治大学が烏来タイヤルの要素を取り入れる節目となった。これにより、烏来の住民たちは政治大学と往来し、政治大学を知り、理解し、認めることで、自分たちのエスニックグループとの「差異」に気が付き、この差異は野蛮、時代遅れ、珍しいものを意味するのではなく、貴重で豊かで多様なものの象徴であることを知ったのである。政治大学は烏来部落とのつながりを深め、「政治大のミニ烏来」の心構えを徹底し、双方のパートナーシップをより実質的なものにするために、2015年度からタイヤル族に関する教養科目を開設した。内容は原住民政、水資源管理、自然環境、言語、土地管理、教育、宗教、文化など、多元性とローカル性という原則のもとで設計され、これまでにこの科目に関わった烏来からの講師は15名に上る。また、このカリキュラムにはフィールドワークも含まれており、学生が烏来での生活や文化を実際に体験できるようになっている。また、ある回の授業では烏来区の高富貴区長を招き、部落の頭目から烏来区の区長になったいきさつと所感を話してもらった。

烏来ロカ・プロジェクトでは、多文化主義と社会再建の原則、およびメンバーと組織の熟練した運営に基づき、烏来の住民が資本経済を抜け出し、コミュニティ経済を主な理念として選択し、烏来の地場産業の発展を一步步推進することに対して協力を行っている。また、烏来の住民とともに地場産業（エコファーム、ワークエクステンション、機織りなど）を立ち上げて活性化させ、コミュニティ経済の趣旨である共有と互惠関係による生活の実践を目指している。機織り産業については、地元烏来の織手の女性たちに対して機織り技術の共有を奨励し、さらに共同でタイヤルの織物を創作して国内外の展示のモデルとなるのを将来的な目標としている。

ところで、本プロジェクト開始期に烏来部落で多くの家や雑草に囲まれた1軒の古い家屋が見つかった。プロジェクトメンバーが丁寧に観察したところ、どうやらこの古い家は、過去の経緯を秘めているようで、色褪せた木製の外壁や屋内に積もった埃など、過去のいろいろなものがこの古い家の持つ意義をさらに豊富にしていた。聞き取り調査後に、実はこの家屋の家主は代々この地に住む原住民で、彼らの幼い頃の生活や出来事は全てこの古い家屋のなかにあり、この家の過去はまさに彼らの子どもの頃の記憶であることがわかった。人生の喜びと悲しみ、栄光と屈辱も、この忘れ去られた家屋とともにあったのである。長い年月によりこの家はだんだんと古くなっていったが、持ち主一家と部落の人々の間には捨てがたい感情があり、一家は部落の人々の愛と協力に感謝していた。その結果、縁があってプロジェクトチームがこの古い家屋を使うことに、持ち主が快諾してくれて、この家屋は部落の公的空間となった。これにより、プロジェクトチームの様々な取り組みによって、古い家（と部落）に新たな気風と活力を与えられるよう願った。古い家屋はここに生まれ変わり、「烏来ミニ政治大」として公共の空間（村落取組拠点、名称は「tataq 超政」^(訳注 xiii)）となった。

「共有」は、前述の「古い家」運営の基本的な心構えである。つまり、「古い家」は、エスニシティや年齢、性別、階級、国籍などを問わない人々が、環境整備や座談会、工芸ワークショップ、子どもたちへの学習支援、パブリック・フォーラムなどの活動を通じて互いに関係を構築し、社会実践とヒューマニズムの推進に取り組む場なのである。社会問題解決型経済の視点から考える

と、「古い家」は様々な機能を持つ地元のつながりの場であり、プロジェクトチームにとっては実践を具現化するフィールドワークの拠点となったのである（黄約伯 2014）。

「古い家」は政治大学コミュニケーション学部ラジオ・テレビ学科の王亜維が開設したドキュメンタリー制作カリキュラムをも巻き込んだ。カリキュラムは共感（Empathy）を柱とし、共感マップ（Empathy map）の技術をドキュメンタリー制作教育と実践の指導方針とし、烏来をドキュメンタリー撮影地点とした。学生たちはまずドキュメンタリー制作技術やドキュメンタリーの歴史、美学の発展や烏来のタイヤル文化に関する基礎知識を授業で学んだあと、学期中にロカ・プロジェクトの引率で烏来に入り実地調査を行った。実地教育では共感マップによる市民リテラシーに関する演習を行い、学生が家族史やコミュニティとしての集合的記憶の調査、あるいは社会的弱者の物語についての映像レポート制作を通じて市民社会に溶け込めるようにし、最終的には学生が自らの視点で烏来の物語を表現することを目指した。カリキュラムの終わりには作品と展示によってコンセプトを拡散し、成果をコミュニティの人々に還元し、また、その過程においてデジタルマーケティングの概念を取り入れて、被撮影者とその成果を共有し還元する。このカリキュラムでは共感を柱とし、学生が調査、発展、創作、推進、還元、デジタルアーカイブなどの演習を通じて、全体的なコンセプトにより映像制作者の共感を発展させ、作品とマーケティングによって観衆の共感を呼び起こすことを目指した。

ロカ・プロジェクト2年目は、改めてコミュニティ経済の内面性を思索し、コミュニティ経済が必要とするコミュニティのエンパワーメントの展開と発展に向けて行動した。プロジェクトではとくに若者と女性のエンパワーメントに力を入れた。まず、若者のエンパワーメントに関しては、プロジェクトが烏来部落で運営していた「Tataq 超政」拠点（烏来の「古い家」）がすでに若者のエンパワーメントの拠点となっていた。エンパワーメントの可能性は部落自体から生まれた力と縁が基となり、現在、烏来小中学校に勤務するユカン・ユラウ（Yukan・Yulaw）先生が、地元で若者のエンパワーメントに協力してくれている。彼は元から公的議題に関心を持っていたが、それを行動に移すことは特になかった。2014年の初め頃、プロジェクトチームがユカン先生に新北市原住民族事務局で応募を募っていた社会学習に関するプロジェクトの情報を知らせたが、その時は計画を提出するか否か迷っていた。その後「ひまわり学生運動」が起こり、デモ隊が主催する原住民青年フォーラムに参加したユカン先生は、部落の人々が公的議題に対して興味を持っておらず、公的議題を話し合う姿勢を部落に根付かせなければならないと感じた。そこで烏来区レジャー産業発展協会に協力を求め、人々が部落意識と共通認識を持つことを目標とし、若者のドキュメンタリー制作ワークショップを提案した。ワークショップでは地元の若者たちが文化アイデンティティ、文化伝承、歴史的記憶、産業などのテーマでドキュメンタリーを5部制作し、その作品は2014年11月16日に烏来キリスト長老教会で行われたドキュメンタリーの成果展で部落の人々に公開された（表3参照）。

表3 烏来の若者によるドキュメンタリー制作ワークショップ成果発表作品一覧

制作者	作品名
王畢莉	「回家」(家に帰る) 故郷に戻り、福山小学校付属幼稚園の保育士として民族語を教える話
タナ・ユミン (打那尤命)	「山胞公司歌舞回憶録 1952-2003」(山胞観光公司の歌と踊りの回顧録 1952-2003) 山胞観光公司の歴史についてのドキュメンタリー
張雨心 黄雅詩	「紀念品小姐」(お土産のお嬢さん) かつての烏来の観光業全盛期に地元の女性たちがお土産販売をしていた歴史についてのドキュメンタリー
ユカン・ユラウ	「唱自己的歌」(自分の歌を歌う) 文化伝承に取り組む烏来小中学校の伝統歌唱隊についてのドキュメンタリー
ファファウニ・ パラムダイ	「烏來的, 這樣」(烏来のは、こうだ) パイワン族の子どもが烏来のタイヤル部落で成長する過程についてのドキュメンタリー

出典：烏来ロカ・プロジェクトにより整理・作成。

ワークショップとドキュメンタリーの撮影・作品公開を通じて、若者が自分の故郷をたどる過程や、原住民居住地における文化伝承の取り組みが記録されたほか、部落のほかの人々のポテンシャルをもつなぎ合わせた。成果展には多くの人々が出席し、終了後もドキュメンタリーについての話題が上るほどであり、ドキュメンタリーの多岐にわたるテーマは、成果展で部落の各年齢層の人々をつなげるのに十分足るものであった。2014年の若者によるドキュメンタリーワークショップに引き続き、ロカ・プロジェクトは2015年も地元の若者たちによる「Tataq 超政共有イベント」に協力し、ほかの原住民部落や地元烏来においてコミュニティ作りの第一線で活躍する人を招き、コミュニティ作りの経験を共有した。また、このような共有イベントを部落大学にカリキュラムとして申請したところ、順調に話が進み開講されることになった。

随伴をしながら必要なときに学術的かつ専門的な助言を行うというのは、政治大学と烏来の部落の人々の対話における原則となっている。ロカ・プロジェクトはあくまで外からの介入者であり、部落のあらゆる事についての決定をしてはいけないし、する権利もない。烏来では土地の商品化が進む趨勢にあり、これを楽観視はしていない。しかし、都市計画の全面的見直しやより幅広い原住民居住地の土地に関する議題に対して、部落自体が自主的に参加し、居住と産業発展という両方の必要性を満たしつつ、永続的な自然環境の価値を確保し、水質と水源を保護する道へと進んでほしいと願うばかりである。ロカ・プロジェクトが地元の原住民の人々に情報を提供し、さらには公的な議論を促進することで、将来的に部落の人々自身が土地商品化の趨勢に反対するようになることを期待している。

第5節 烏来編織協会の展示企画と工芸復興の補佐

政治大学烏来ロカ・プロジェクトは開始1年目にして様々な実践や調査を試みた。努力の結果、2014年4月16日に社会实践オフィスの創設が叶い、同年5月3日に烏来の昔ながらの商店街に拠点の看板が掲げられ、政治大学は烏来の原住民の人々から信頼されるようになり、パートナーシップを確立した。2014年7月3日には、烏来の工芸家から135点の作品を借り、政治大学の

行政ビルで1年目の成果展「政治大学と烏来との往来・ネットワーク」を行い、政治大学の教職員たちもその美しさに感動した。展示当日は工芸家を招き、自らの工芸文化の学びや創作の軌跡についての話をしてもらい、全学の教職員や文山区住民を対象に、数回に分けて小さな織物の製作体験も行った。また、本学の創新育成センターのメンバーと烏来タクシー観光協会、烏来編織協会との座談会を行い、今後の提携の可能性について討論を行った。展示は1日だけだったが、本学の行政ビル1階で原住民族の機織り作品展示を初めて成功させたこともあり、事務部門が新たな時代の文化創生と社会実践¹⁵に対して重視するようになったことは、事務関係における大きな進展となった。

その後、1年目のとある実践案で、ロカ・プロジェクトメンバーで広告学科の陳文玲が「X書院」の学生を引率し、烏来で織り手の女性たちから機織りを学び、烏来編織協会の周小雲理事長とともに織物を利用したしおりを創作し、新入生歓迎会で大学1年目の新入生にプレゼントとして渡すことにした。この小さな織物は政治大学で原住民トレンドを引き起こした。政治大学の教員、学生、そして烏来の機織り工房の織り手たちが皆でともに作り上げた、協力による学びという名の美しい楽曲とでもいえよう。そしてこれはロカ・プロジェクトが最も望んでいた共有概念の拡散であり、政治大学の教員と学生にとって恐らく今までで最大の異文化ショックによる多文化教育への取り組みとなった（王雅萍・湯京平・陳文玲 2014）。

烏来ロカ・プロジェクトは、最終的には集落で企業を育て、烏来特有のブランドを確立することを徹底するべく、地元の烏来編織協会とも積極的に協力して織物展を行ってきた。専任アシスタントで烏来拠点のマネージャーである范月華の橋渡しで、何度か折衝を重ね、編織協会の林慧貞会長や協会幹部の協力の下、2015年3月21日から4月18日まで、文山区公民会館で「織、苧、新織」^[訳注 xiii] 工芸展を開催し、体験学習も行った。実際に外で工芸展示を積極的に行い自分の作品を紹介することは部落の主体性の表現にもつながり、ロカ・プロジェクトは烏来の織り手の女性たちからも感謝された。例えば開幕当日の体験学習の講師であるファファウニ・バリムダイ¹⁶は次のような感想をプロジェクトメンバーに伝えた。「今日は文化芸術の雰囲気の中、歴史ある古い建築物を改造した文山公民会館に来て、『織、苧、新織』工芸展に参加しました。これは烏来編織協会と政治大学ロカ・プロジェクトがともに企画した展示で、このような素晴らしいことに関わることができて光栄です。いろいろな人から学ぶ機会をもらうことができたことに感謝します。私の夢のなかの通帳に希望が少しずつ積み重ねられています。頑張りましょう！」

部落の人とともに展示企画をするのは、時には厳しい折衝もあり、ロカ・プロジェクトにとっては得難い実務経験となり、展示企画についての話し合いによる学び合い学習によって、相手への大きな信頼を互いに築き続けることになった。湯京平はその関係を次のように指摘している。大学は屈折レンズのような役割を果たしており、烏来編織協会はロカ・プロジェクトとの協力を通じて、対外的には注目を浴びる宣伝効果をもたらし、内部に対しては伝統手工芸の価値を再度肯定することになり、機織りを通じて外国の手工芸家と対話する可能性を確立した。また、展示企画を何度か経験することで自己アイデンティティを見つけ、それによって伝承の意志が強まり、新たな創作の可能性を考えるようになった。例えば2015年9月初めに白糠町で地元特有のフン

ペ祭りに参加したが^{〔訳注xiv〕}、その祭りの前にメンバーたちは北海道で始終案内を引き受けてくれた北海道大学アイヌ・先住民研究センター長の常本照樹教授と落合研一准教授、山崎幸治准教授の案内で阿寒町に向かった。山崎准教授から阿寒町のアイヌコタンがどのように形成されたかの説明を受け、現地で工芸店を営む阿寒アイヌ工芸協同組合の西田正男理事長やアイヌコタンで工芸店を営むアイヌの人々を紹介してもらい、経験について話を聞いたり交流したりした。また烏来編織協会がロカ・プロジェクトチームのために作ってくれたタイヤル文様のベストもアイヌの工芸家たちから良い評価を受け、それによって現地の人々とさらに打ち解けて文化交流を行うことができ、互いの特別な文化についても情報を共有することができた¹⁷⁾。また、2016年5月中旬の展示は、北大アイヌ・先住民研究センターの協力を得て20名近くのタイヤルのメンバーが白糠町、阿寒町、平取町の3か所で展示あるいは交流を行い、5月20日には台北駐日経済文化代表処札幌分所より招待を受けて蔡英文総統就任記念パーティーで踊りを披露した。また、織り手の数人は現在も平取町二風谷の織物工芸家との交流を続けており、厚い友情を築いている(表4参照)。

表4 烏来編織協会による訪問先と展示の一覧

期日	訪問先 或いは展示会場	訪問或いは 展示のテーマ	烏来からの参加者
2014年3月23日	北海道大学	学術シンポジウム	宋神財先生夫婦
2014年7月1日	政治大学行政ビル一階	政治大学と烏来との往来・ネットワーク	編織協会
2015年3月21日-4月18日	文山区公民会館	「織、苧、新織」工芸展	編織協会
2015年9月3日-7日	北海道札幌市、阿寒町アイヌコタン、白糠町	北海道大学 白糠町	周小雲、游秋蘭 厳欣怡、莊育桔
2016年5月15日-29日	北海道大学(札幌)、白糠町、平取町、阿寒町	展示	タイヤルの特色を持つ 75点の工芸作品
2016年11月23日	烏来	白糠町との姉妹提携	編織協会
2017年03月23日-26日	アメリカ・ロサンゼルス台北駐米経済文化代表処文化センター	「工芸復興、機織りと記憶の共有」展示	周小雲とラバイ・ユヤウが展示品107点を携帯。
2017年7月15日	烏来	北海道白糠町	文化季(烏来区の行事)に参加
2018年1月31日	国立台湾博物館	屈尺群 ^{〔訳注xv〕} 関係の收藏品	收藏品のスケッチと計測
2018年4月1日	国立台湾博物館	屈尺群関係の收藏品	收藏品のスケッチと計測
2018年7月16日-21日	国立民族学博物館(大阪)、天理参考館(奈良)	烏来と関係のある織物を探し、その素描と計測。	高林美鳳、周小雲、游秋蘭、高蓮君、高玉蘭
2018年8月7日-10月28日	烏来タイヤル民族博物館	「織物の道を振り返る—タイヤルの織物と現代のパッチワークの対話」展示	游秋蘭

出典：筆者により整理・作成。

そのほか、烏来編織協会は台湾大学同窓会と政治大学社会实践オフィスの協力により、2017年23日から26日までロサンゼルス経済文化代表処文化センターで「工芸復興、機織りと記

憶の共有：台湾原住民の機織りの北アメリカ展示交流」を行った。政治大学からは烏来拠点のマネージャーである范月華が展示企画と連絡において協力をし、編織協会から100年もの花嫁衣裳、貝ビーズのベスト、織物、頭部用の飾りなど所蔵品107点を持ち出して展示を行った。編織協会からは周小雲とラパイ・ユヤウの機織りの先生2人が会場で機織りの実演を行った。また、台湾大学同窓会会長の周述蓉先生¹⁸の協力により現地にある台湾の在外機関の参加が叶い、烏来タイヤルの素晴らしい機織り技術が国際的進出を果たした。この展示企画により編織協会の織り手の女性たちは機織りに対してさらに自信を持つようになったが、その一方で機織り文化の伝統がすでに一部途絶えていることから困惑もしていた。

烏来編織協会の織り手の先生方は、アメリカでの展示後、博物館の収蔵品を観察し、文様分析の能力を強化し、さらにはカリキュラムのなかで「重製（複製）」^{〔訳注xvi〕}を行い、ますます自信を増しており、特に、国立台湾博物館の李子寧組長の計らいで同館のタイヤル屈尺群関係の所蔵品94点¹⁹を確認した時には、大いに士気を高めた。また、2018年7月中旬には、大阪の民族学博物館と奈良の天理参考館に収蔵されている烏来タイヤルの織物を探すため再度日本を訪問し、伝統の機織り文化に対する自信を再確認した。2019年に入り、編織協会の有志がタイの機織り村を訪問するなど、新たな総合的発展が期待される。そのほか、2018年には編織協会前理事長の游秋蘭が「織物の道を振り返る—タイヤルの織物と現代のパッチワークとの対話」展示を行った。展示コンセプトは、宜蘭県南澳から烏来部落に嫁いで目にした部落間の文化の違いを振り返り、退職後に再び機織りを習い始めたことを意識した1人の女性の人生であり、手先の器用さを生かし機織りとパッチワークを組み合わせた新たなデザインである。

おわりに

筆者は台湾の社区大学設置運動と原住民族部落大学設置後の運営ビジョンの共振の過程に関わり、その後、新北市烏来区の部落大学のカリキュラム展開を通じて、女性のライフストーリーである「イナの花嫁衣裳」を出発点とした女性のエンパワーメントに関わり合った。さらに政治大学では、烏来ロカ・プロジェクトによって烏来を理解するためのタイヤル学の教養科目が開設されたり、烏来の工芸文化復興に関する様々な講演が行われたりした。また、当プロジェクトに参加した教員や学生がしばしば烏来に出入りし、烏来のミニ政治大で現地の女性や青年へのエンパワーメントが行われた。その過程で烏来編織協会の展示企画や工芸の復興を長期間補助し、さらに部落の国際化を進めた。

喜ばしいことに2019年5月24日、「原住民族教育法」の修正案が可決されたが、それはこの法律が成立してからの20年間で最大の修正であると言えるだろう。今回の修正で大きく前進したのは4点目の「原住民族教育の対象を国民全体に広げ、エスニックグループ間の相互理解と尊重を促進する」という点であり、これは原住民文化を重視する方向へと台湾の国民全体を導くものであるが、その前の2013年から政治大学ではすでに烏来ロカ・プロジェクトを通じて教員や学生が交流や共同学習などを開始していたというのも喜ばしい限りである。現在、台湾の社会は

変わりつつある。教育部は2017年に「大学の機能は学術研究と人材育成だけでなく、文化を向上させ、社会サービスを行い、国家発展の促進を主旨とするべきである。また『地元とつながる』ことについても責任を持ち、大学の社会的責任 (University Social Responsibility、以下USR) を実践するべきであり、それにより都市と農村の発展、文化振興促進、コミュニティの再生、地元の価値創造を先導するべきである」という新たな政策を打ち出した。教育部は「大学・専門学校による社会的責任実践プロジェクト推進補助要綱」を制定する一方で、2017年から「大学による社会的責任の実践プロジェクト」(USRプロジェクト)を開始し、「社会的責任を果たす」ことを各大学が2018年から取り組むべき重要な項目であるとしている。これにより全ての大学が地元としっかりしたつながりを持ってそこに根を生やし、教員と学生が自ら望んで社会的責任への参与と実践に取り組むことが期待される。烏来は政治大学から最も近い原住民部落であり、大学から放たれるエネルギーは、将来の部落の工芸復興に新たな生命力を注ぎ込めるものと信じてやまない。

注

- 1 社区大学全国促進会の2009年の統計によると、台湾には社区大学(本校)が88か所、分校が18か所、原住民部落社区大学が19か所あった。
- 2 当時、410民間教育改革団体の事務所日本語を学び、教育改革関連の勉強会に参加した。日本語教師は蕭志強氏であった。
- 3 詳細は(王雅萍2013)。
- 4 曹天瑞が「宜蘭県原住民校長推展泰雅民族教育之研究」(宜蘭県の原住民校長によるタイヤル民族教育推進についての研究)で当時の宜蘭県の校長による原住民部落大学の取り組みについて言及している(曹天瑞2014)。
- 5 原住民大学創設のアセスメント報告書は、東華大学民族学院の浦忠成院長(学部長)が原住民委員会への委託で行ったものである。
- 6 原住民大学については東華大学の浦忠成院長が原住民委員会の委託を受け、現在計画並びに調査を行っている。
- 7 2014年4月7日の慈済大学通識中心(教養センター)での講演。
- 8 政治大学の烏来ロカ・プロジェクトは大学の社会実践制度のもとで生まれた。「政治大学と烏来のロカ発展—大学のパートナーシップと統合型社区管理の実践プロジェクト」というのが、科技部からの補助金を受けて行った当時のプロジェクト名称である。「ロカ」はタイヤル語のlokahに由来する。lokahとは挨拶言葉であり、「頑張る」という意味でも使われる。政治大学のプロジェクトチームはこれを「楽酷」と翻訳した。これは単なる音訳ではなく、若者にロカ・プロジェクトを好きになってもらい、楽しく(楽)クール(酷)でいられるようにという期待を込めたものである。
- 9 以上は、社会実践オフィス・烏来村落組拠点マネージャーの范月華が参加し補佐した科目をまとめたものである。
- 10 外省台湾人協会に関して、最も注目が集まったのがこの「タンボボ執筆プロジェクト」であった。
- 11 外省台湾人協会の書籍企画理念より引用。
- 12 当時のカリキュラム紹介より引用。
- 13 ロカ・プロジェクトの名称の語源や意味は、注8参照。
- 14 略称は「高教深耕計画」。教育部が2018年から始めた補助金プロジェクトであり、大学が自身の特色をさらに発展させることをサポートするものである。
- 15 この展示は本来、大学構内の山の上にある研究暨創新育成総中心(研究創新育成センター棟、略称は研創中心)で行われる予定だったが、建物の工事後の引き渡しが遅れたため、プロジェクトリーダーの湯京平と実行責任者の筆者が呉思華学長に掛け合った結果、学長からのサポートを受け、人事室長と協議し全学教職員の研

修活動も兼ねることになった。

- 16 ファファウニは屏東のパイワン族である。夫が警察官で烏来に赴任し、子どもも烏来で就学しており、烏来教会と編織協会でタイヤルの女性たちとともに織物や手工芸を学んでいる。
- 17 「新北市烏来編織協会弁理参訪北海道愛努族祭典暨原住民文化保存与技艺创新成果報告書」（烏来編織協会による北海道アイヌの祭儀参観ならびに原住民文化保存と技術創生成果報告書）、2015年9月3-7日、政治大学ロカ・プロジェクト専任アシスタントの范月華により整理。
- 18 周述蓉先生は台湾大学の地質科学博士であり、文山社区大学で教鞭をとっていたこともあった。社区大学での古い玉に関する授業では多くの学生を引き付け、引率した学生の鄭景隆は文山区十五份遺跡を発見した。その後アメリカ・ロサンゼルスに移住し台湾大学同窓会会長を務め、それが縁で社会実践オフィスと烏来の織り手の先生方がアメリカに招かれ、展示の実施に至った。
- 19 2018年11月26日に李子寧部長が国立政治大学で行った「国立台湾博物館の烏来収蔵品——総督府博物館番族品系統と佐久間財団番族蒐集品系統の収蔵品——」というテーマの講演で、94点の収蔵品が烏来のものだと判明した。

訳注

- i 本文中では台湾で一般的に使われる「原住民」（オーストロネシア系先住民）という語をそのまま使用する。
- ii 「ロカ lokah」はタイヤル語で「頑張る」「健康」などの意。詳細は筆者注8。
- iii 本文中では community の中国語訳である「社区」は「コミュニティ」と訳す。ただし、固有名詞（「社区大学」など）はそのまま使用する。
- iv 本文中では台湾で一般的に使われる「部落」（ある程度の自律性と社会的機能をもつ原住民の村落）という語をそのまま使用する。
- v 1994年4月10日の教育改革デモに関わった団体。
- vi 当時の部落社区大学はその後、原住民族部落大学と名称変更された。
- vii 現在の台湾の法制度上で「原住民族」という語は、先住性に基づく集合的権利の主体であることを含意する。本文中ではこの語を筆者の用法に従いそのまま使用する。
- viii 本文中では、「族群」に「エスニックグループ」という訳語を使用する。
- ix 台北市原住民族部落大学の拠点。
- x 工房名の由奈は、同工房を経営する汪秀琴氏のタイヤル名ユガイ yungay に由来する。
- xi 共通の規範を守るタイヤルの伝統的な共同体およびその規範。
- xii tataq はタイヤル語で作業小屋の意、超政は超正（素晴らしいの意）の正の字の代わりに同音語の政治大学の「政」を使い、掛詞にしている。
- xiii 「苧」は伝統的織物の材料であるチョマを指す。
- xiv 烏来編織協会のメンバーと政治大学のロカ・プロジェクトの補佐メンバーが北海道を訪問した。フンベ祭りはクジラの伝説にちなんだアイヌ民族の祭り。
- xv 烏来タイヤルの古名。
- xvi 現代の技術伝承者や工芸家が博物館などの古い収蔵品を観察し、同じように作り上げること。技術の習得や復活もその目的に含まれ、台湾原住民族の工芸において一般の複製と区別される。

参考文献

- 蔡侑霖 (2014) 「烏来老屋手工小作坊——社区経済的想像与实践——」『人文創新与社会実践電子報』第14卷 (<http://www.hisp.ntu.edu.tw/news/epapers/24/articles/67>、2020年4月15日最終閲覧)。
- 曹天瑞 (2014) 『宜蘭県原住民校長推展泰雅族教育之研究』宜蘭県羅東鎮：宜蘭県原住民族部落大学。
- 陳文玲 (2014) 「有候時間會停止」『人文与社会科学簡訊』第16卷1期、8-18頁 (<https://www.most.gov.tw/most/attachments/0627c549-4a68-4045-89cd-baf2657525c7>、2020年4月15日最終閲覧)。
- 范月華 (2016) 「烏来地区的獵人学校」『原教界』第72期、55-57頁。
- 范月華 (2018) 「烏来伝統織布学習の師生互動」『原教界』第80期、30-33頁。
- 谷縦・喀勒芳安 (2006) 「原住民部落大学研究論文評分析」『原教界』第10期、20-23頁。
- 郭孟佳 (2004) 「公主愛女傭：觀光發展下的烏来泰雅族女性」、台北：世新大学社会發展所修士論文。
- 黄約伯 (2014) 「大学与烏来泰雅族社区的創新合作模式——烏来小政大与政大小烏来——」、サイト『新作坊』 (<http://www.hisp.ntu.edu.tw/publication/articles/7>、2020年4月15日最終閲覧)。
- Huang, Yueh-Po (2014), "A Comparative Analysis of the Immersion Program at Two Atayal Schools in Northern Taiwan,"

-
- Paper presented at IEAES 2014 with JASCA: The Future with/of Anthropologies, Makuhari Messe, Chiba, Japan, 15-18 May.
- Huang, Yueh-Po (2014), "From Acquiescence to Resistance: An Anthropological Analysis of the Self-Protection Movement in An Atayal District in Northern Taiwan", Paper accepted at the 2014 Annual Conference of the East Asian Anthropological Association (EAAA), Yeungnam University, Gyeongsan, South Korea, 14-16 November.
- 宋神財 (Alow·Hola) 編著 (2013) 『時代与遭遇——南勢溪流域泰雅部落文化紀錄与研究——』台北: 新北市文史学会。
- 湯京平 (2014) 「政大樂酷期中報告」台北: 科技部人文創新与社会实践計畫期中報告 (未刊行)。
- 湯京平 (2016) 「政大樂酷期末報告」台北: 科技部人文創新与社会实践計畫期末報告 (未刊行)。
- 王雅萍 (2006) 「部落・學習・競爭力——從部落大学到原住民部落社区大学的原住民教育——」『原教界』第 10 期、10-17 頁。
- 王雅萍 (2013) 「電影在原住民教育的運用」『原教界』第 49 期、8-9 頁。
- 王雅萍・湯京平・陳文玲 (2014) 「政大烏來樂酷計畫」『人文与社会科学簡訊』第 16 卷 1 期、4-7 頁 (<https://www.most.gov.tw/most/attachments/0627c549-4a68-4045-89cd-baf2657525c7>、2020 年 4 月 15 日最終閱覽)。
- 王增勇 (2013) 「長期照護在原鄉實施的檢討」『社區發展季刊』第 141 期、284-290 頁。
- 文崇一・蕭新煌編著 (1990) 『烏來鄉志』台北: 烏來鄉公所。
- 烏來鄉公所 (1986) 『山胞族譜資料』台北: 烏來鄉公所。